

No. 122	A T C / D D D systemを用いた他施設抗菌薬サーベイランスの導入		
申 請 者	診療部	薬剤師	宮川 慶子
開 催 日		迅速審査	平成27年5月12日
研究の概要	富山県の医療施設における抗菌薬用量調査の標準化および抗菌薬の使用動向を調査し、結果をフィードバックすることで、各施設における抗菌薬の適正使用への一助とする。		
判 定	条 件 付 承 認		

No. 123	Criminal Responsibility predicts Long-term Hospitalization in the Medical Treatment and Supervision Act in Japan		
申 請 者	診療部	医師	松原 拓郎
開 催 日		迅速審査	平成27年5月22日
研究の概要	日本では、心神喪失ならびに心神耗弱の状態で重大な他害行為を行った者に対する医療について定めた新たな法律が2005年に施行され、医療観察法と一般に呼ばれている。この医療観察法で定められた入院処遇のガイドラインでは、急性期、回復期、社会復帰期といった3つの治療期が設定され、通算で1年半を標準的な入院期間としている。しかしながら、国が行った入院処遇における年度別入院処遇日数は徐々に増加しており、2013年には2年半まで増加してしまった。このような背景から、日本では対象者の入院処遇日数が長期化することを防ぐため検討を重ねられてきたが、現在においても一貫した統計データは存在していない。本研究においては、責任能力の程度によって入院日数ならびに入院経過にどのように影響を及ぼすかを比較検討し、入院処遇の長期化につながる要因の存在を検討することを目的とした。		
判 定	承 認		

No. 124	心身喪失等医療観察法モデル事例ケースブックの作成に関する研究		
申 請 者	診療部	精神科診療部長	村田 昌彦
開 催 日		迅速審査	平成27年6月9日
研究の概要	本研究は、厚生労働科学研究「医療観察法の運用面の改善等に関する研究」(H21-こころ一般-011)の分担研究「精神保健判定医に必要な知識及び技術の習得方法に関する研究」(担当:八木深)の一環として実施される。本研究は、心神喪失等医療観察法(以下「医療観察法」)の運用中遭遇する判断に迷う事例をモデル化して分析し、守秘義務を負った判定医によるクローズドな判定事例研究会(主催:厚生労働省)での意見を踏まえ、架空モデル事例ケースブックの形で公表し、医療観察法制度を円滑に運用する上で有用な情報を提供することによって、医療観察法の審判・鑑定の質のさらなる向上を図ることを目的とする。		
判 定	承 認		

No. 125	入院処遇から通院処遇を経ないで処遇終了となる事例の予後調査		
申 請 者	診療部	精神科診療部長	村田 昌彦
開 催 日		迅速審査	平成27年6月9日
研究の概要	本研究は厚生労働科学研究「重大な被害行為をおこした精神障害者の適切な処遇及び社会復帰の推進に関する研究」（主任研究員平林直次）の分担研究「医療観察法から精神保健福祉法による医療への円滑な移行に関する研究」として、平成22年8月27日に倫理委員会に申請、承認を得た。その後研究が継続されたため、平成25年4月26日に倫理委員会に研究継続として再度申請し、了承を得た。前回申請時以降、以下に示す研究1 処遇終了退院者の後ろ向き研究（処遇終了の要因調査）および2 処遇終了退院者の前向き研究（退院後の予後調査）について実施してきたが、今回研究期間がさらに平成27年度より3年間延長になったため、研究継続について承認をいただきたい。研究課題名は変更されたが研究内容はこれまで同様である。しかし、今後は医療観察法を終了して退院する対象者の予後調査について重点的に進めていくことを計画している。 研究1:入院処遇から医療観察法を終了して退院し通院処遇に移行する対象者について、診療支援システムを用いてどのような要因によって通院処遇とならず処遇終了となったのか調査する。最高裁により医療観察法を適応するにあたり、疾病性、治療反応性、社会復帰阻害要因の3要件を必要としているが、この3要件に沿って対象者の問題点を抽出する。 研究2:入院処遇から処遇終了として退院した対象者について、退院前（地裁に退院申請を提出後）に対象者本人から同意を取得し、退院後に年一回利用している医療機関にアンケート調査を行う。返送されたアンケートをもとに、通院治療を継続しているか、トラブルを生じていないか、経済基盤が安定しているか、等の調査を行う。なお、研究2では処遇終了退院者のみでなく、通院処遇となる対象者にも同意を取得し、退院後の通院状況等確認する予定にしている。通院処遇対象者の予後調査は本研究と同じ平林班で行われている永田分担研究「指定入院医療機関退院後の予後に影響を与える因子の同定に関する研究」に協力することで情報を集積したいと考えている。		
判 定	承 認		

No. 126	医療観察法指定入院医療機関におけるモニタリング情報調査研究について		
申 請 者	診療部	精神科診療部長	村田 昌彦
開 催 日		迅速審査	平成27年6月9日
研究の概要	本研究は厚生労働科学研究「医療観察制度の鑑定入院と専門的医療の適正化と向上に関する研究」の分担研究「医療観察法指定入院医療機関におけるモニタリング情報調査研究について」として、2011年より全国の指定入院医療機関における診療支援システムから匿名化した情報を収集し、基礎的なデータ解析を開始した。その後も定期的にデータを収集し、分析を継続している。本研究では入院期間の推移など、治療状況をマクロ的な視点で把握し、分析・評価を行うためにシステムティックな匿名化した情報を収集し、基礎的なデータ解析を行っている。入院期間の推移など、治療状況をマクロ的な視点で把握し、分析・評価を行うためにシステムティックなモニタリングデータを収集することは重要と考えられる。本研究では指定入院医療機関における対象者の概要の推移を把握し、検討することを目的とする。		
判 定	承 認		

No. 127	当院認知症疾患医療センター各科における診断の傾向		
申 請 者	診療部	心理療法士	小林 信周
開 催 日	平成27年6月26日		
研究の概要	当院の認知症疾患医療センターは神経内科と精神科による共同診療が行われている。Awata(2014)によれば全国の認知症疾患医療センターの92.3%に精神科、50.4%に神経内科が設置されている。神経内科と精神科共同の物忘れ外来について、三好ら(2008)や高田ら(2004)は、神経内科医による神経症候や画像病変の評価、精神科医による精神症状の評価やコントロールといった、共同診療による相互補完的な役割分担を利点として挙げた。日本認知症学会の認知症診断のフローチャート(2008)では、認知症診断の手順として、病歴聴取、身体診察、神経心理検査、血液検査CTまたはMRIの画像検査を行うとしている。また、中野(2005)の認知症の画像診断ガイドラインでは、認知症の早期診断や鑑別診断におけるMRIやSPECT(PET)の実施が推奨されている。小田ら(2010)の認知症初診患者への各種検査実施割合の調査において、神経内科の方が髄液検査、精神科の方がCTWMS-Rなどの神経心理検査の実施割合が高く、血液検査、HDS-RやMMSE、MRI、SPECTPETMIBGでは両者に差がなかった。前田ら(2009)による認知症診断におけるSPECTの利用についての調査では、1ヵ月間の新患の8.4%がSPECT検査を受けたが、SPECTを有する施設では29.6%、SPECTのない施設では1.9%の利用率であった。神経内科医は12.1%の患者にSPECT検査を行ったが、精神科医は5.3%であった。SPECTを有する施設は86.1%がSPECTを利用したが、SPECTのない施設のSPECTの利用率は6.4%に過ぎなかった。SPECTを有する施設に勤務する神経内科医は全員SPECTを利用したが、精神科医の利用は71.4%であった。総じて、SPECTの施行は対象が早期認知症で鑑別が問題となるケースであった。神経内科はほぼ全ての疾患でバイオマーカーや画像所見に依って診断するが、精神科の主な対象疾患である統合失調症、感情障害や神経症性障害といった精神疾患の診断はバイオマーカーや画像所見に基づくものではない。藤本(2008)はこのような診断プロセスの差異が認知症診断における差異を生み出しているとしている。各科の患者背景、諸検査の利用状況、診断の内訳の特徴を比較検討して、当院の認知症疾患医療センターの利点及び課題について明らかにする。		
判 定	承 認		

No. 128	マイクロ波ドップラセンサによる非接触・無拘束で利用可能な「睡眠状況推測システム」の開発		
申 請 者	診療部	第二神経科医長	細川 宗仁
開 催 日	平成27年7月1日		
研究の概要	睡眠障害の診断には終夜睡眠ポリグラフ検査(以下、PSG)が行われるが、患者にとって入院や各種検査端子の装着など負担が生じることが課題となっている。マイクロ波ドップラセンサを用いた「非接触バイタル感知システム」について、同時に測定したPSGデータと相関関係を解析し、睡眠及び覚醒状態などを自動弁別するアルゴリズムの開発を行い、自宅寝室等に容易に設置可能で非接触・無拘束でモニタリング可能な「睡眠状況推測システム」の実用化に取り組む。		
判 定	承 認		

No. 129	認知症患者の家族と関わる際に看護師が抱える困難と対策について		
申 請 者	看護部	看護師	中田 由紀子
開 催 日		迅速審査	平成27年8月3日
研究の概要	認知症患者の家族との関わりにおいて困難を感じた経験とその時の行動、家族との関わりにおける考えについて、看護師にインタビューガイドに基づく半構成的面接を行う。得られたデータは質的帰納的に分析し、認知症患者の家族と関わる際に看護師が抱える困難と対策について明らかにする。		
判 定	承 認		

No. 130	精神科看護の魅力を探る		
申 請 者	看護部	看護師	橋山 貴志
開 催 日		迅速審査	平成27年8月3日
研究の概要	当精神科病棟に入院している患者の約70%は統合失調症が慢性化し長期入院となっている。そのため、看護師は見通しが持てず無力感を感じる事が多い。また、文献を見渡してみると精神科看護の困難さや苦悩に関するものが多い。しかし病棟のスタッフを見ると、やりがいを見いだせずあきらめた様子で働く人がある一方、楽しそうに働く人もいる。楽しいと感じている人たちは精神科看護の何に魅力を感じているのだろうかとうと疑問を感じた。そこで今回、アンケートとインタビューを通して当病棟における精神科看護の魅力を明らかにし、これまで精神科看護に魅力を感じていなかった看護師が精神科看護の魅力に気づき、やりがいを持って看護を実践する契機となればと考えた。		
判 定	承 認		

No. 131	レビー小体病（LBD）と非レビー小体病（non-LBD）における核医学画像所見の検討		
申 請 者	診療部	神経内科診療部長	小竹 泰子
開 催 日		迅速審査	平成27年8月3日
研究の概要	(1) 研究の背景 123I-MIBG心筋シンチ(MIBG)はパーキンソン病(PD)やレビー小体型認知症(DLB)などのレビー小体病(LBD)では心臓のMIBG集積が低下し、アルツハイマー型認知症(AD)などとの鑑別に有用であると指摘されている。また123I-FP-CITドパミントランスポーターSPECT(DAT)はLBDで線条体集積低下を認め、ADなどとの鑑別に有用であると指摘されている。99mTc-ECD脳血流SPECT(ECD)は、DLBや認知症を伴うパーキンソン病(PDD)で後頭葉の血流低下を指摘されている。しかし、これらの核医学検査のうちLBDに対しての精度は明らかにされていない (2) 研究の対象 対象は、LBD患者48例(DLB33例、PD7例、PDD4例)、レム睡眠行動障害(RBD)4例)とnon-LBD患者17例(AD8例、進行性核上性麻痺(PSP)2例、多系統萎縮症(MSA)1例、大脳皮質基底核変性症(CBD)1例、血管性認知症(VAD)1例、本態性振戦(ET)1例、嘴銀顆粒性認知症(AGD)1例、睡眠時無呼吸症候群(SAS)1例、正常1例)である。 (3) 研究方法 MIBG、DAT、ECDを行っているLBD患者48例とnon-LBD患者17例について、診療録と画像検査をより、後方視的に検討を行う。 1患者の診療情報を診療録より取得する。 年齢性別病名病歴MMSE、HDS-R 2患者の画像検査(MIBGDATECD)を取得する。 3統計で各種核医学診断精度の検討を行う。 (4) 評価項目 LBD患者のMIBGDATECDを後方視的に統計学的に評価する。 (5) 統計的事項 MIBGとDATではANOVA一元配置分散分析を行い、ECDではカイ2乗検定を行う。		
判 定	承 認		

No. 132	重複精神障害を持つ対象者に対するピアレビュー施行方法に関する研究		
申 請 者	診療部	精神科診療部長	村田 昌彦
開 催 日		迅速審査	平成27年8月26日
研究の概要	平成17年7月15日に医療観察法が施行され、平成27年3月31日現在、指定入院医療機関は31施設設置されている。厚生労働科学研究により、指定入院医療機関の医療のバラツキが法施行当初より指摘されていた。このような施設間の医療のバラツキを修正し、標準的な医療を提供することを目的として、平成24年度より厚生労働省「心神喪失者等医療観察法医療水準向上等事業(通称、ピアレビュー事業)」が開始された。同事業では、全国の指定入院医療機関を受入れ施設と派遣施設に分け、相互にピアレビューが実施された。その結果、各指定入院医療機関の標準化はある程度進んだが、予算的課題もあり、さらに効果的かつ効率的な同事業の実施が求められているのが現状である。また、各指定入院医療機関の長期入院者の多くが、統合失調症に加え重複障害(パーソナリティ障害、精神遅滞、発達障害等)を持つ対象者であることが判明しており、薬物療法だけではなく多職種チームによる心理社会的治療の強化が求められている。このような背景もあり、厚生労働省は事業のより効果的かつ効率的な実施方法の検討を進めている。本研究の目的は、指定入院医療機関の効率的かつ効果的なピアレビューの実施方法を考案することであり、当院は研究主体であるセンター病院に協力したい。		
判 定	承 認		

No. 133	動く重症心身障害病棟の建て替えに伴う強度行動障害への影響(仮)		
申 請 者	看護部	看護師	加藤 麻紀
開 催 日		迅速審査	平成27年8月26日
研究の概要	近年は、行動障害に対する理解と対処方法への支援が活発になってきている。中島は知的障害の人が示す行動障害の分類を4つのカテゴリーに分けており、私たちが看護をおこなう対象者の大部分は発達遅滞が極めて重い「動く重症心身障害児タイプ(大島分類では区分5、6、10、11、17、18に該当する)」と混乱状態を伴う激しい行動障害で、重度遅滞を伴う自閉症に典型的な「強度行動障害タイプ」の2つである。行動上の問題として多動、自傷、常同行動、固執、攻撃、異食などに重点を置き、規則正しい生活と環境を整えるよう関わっている。今年度、病院新築に伴い新病棟への引っ越しが予定されているが、長期入院で長期療養をしている対象者には環境の変化により身体・精神症状に大きな影響を生じることが懸念される。先行研究では、山元ら?)が動く重症心身障害病棟の建て替えにより、行動障害の変化がみられたと報告している。そこで今回、環境の変化によって対象者の強度行動障害の変化を強度行動障害判定基準を基に調べることで明らかにしていく。また、今後の環境の変化において予防的な対応ができることを目的とし、実践することとした。		
判 定	承 認		

No. 134	視覚的コミュニケーションで行動障害の軽減を図る取り組み		
申 請 者	看護部	看護師	遠藤 陽子
開 催 日		迅速審査	平成27年9月1日
研究の概要	日常生活を本人が理解できるように、シンボルカードで視覚的に提示しスケジュールの把握を行うことで行動障害の軽減を図っていく。		
判 定	承 認		

No. 135	嗅覚刺激を介した神経難病患者への誤嚥予防の取り組み		
申 請 者	看護部	看護師	本郷 拓
開 催 日	平成27年7月31日		
研究の概要	ブラックペッパーの香りがするアロマパッチが神経難病患者の誤嚥予防に有用性があるかを検討する		
判 定	承 認		

No. 136	精神疾患患者の転倒予測時における熟練精神科看護師の判断		
申 請 者	看護部	看護師	島 聡美
開 催 日		迅速審査	平成27年9月28日
研究の概要	精神科においても転倒は発生する事故の中で最も頻度の高い出来事であり、転倒予防は、重要度の高いケアである。転倒アセスメントシートを用いて予防に努めているが転倒事例は年に数件発生しており、未然に防ぐことは難しいと日々感じている。転倒事例を振り返ってみると、転倒発生時やその前には転倒やその危険性について、予測・察知している看護師がいることがいた。それらの情報は、事前に看護師間で共有されてはおらず、看護師の直観的なものが多かった。転倒を予測し、転倒の危険を判断するまでの直観的な思考過程を共有することが転倒予防のケアには大切ではないかと考えられる。看護師の中でも熟練看護師は、複数の推論や看護行為の選択肢をもっていることから、それらを言語化し構造化していくことで今後の転倒を予防し看護ケア向上への示唆が得られるのではないかと考えた。		
判 定	承 認		

No. 137	薬剤耐性菌サーバランスの強化及びゲノム解析の促進に伴う迅速検査法開発に関する研究		
申 請 者	診療部	臨床検査技師長	松本 清
開 催 日		迅速審査	平成27年9月28日
研究の概要	平成26年より新たに届出対象となった、カルバペネム耐性腸内細菌科細菌(CRE)感染症は、現在、世界的な視野で急速に広がっており、国内でもアウトブレイクの報告例がある。本研究は、プラスミドによって耐性遺伝子が伝播されると考えられるCRE感染症、薬剤耐性アシネトバクター感染症、薬剤耐性緑膿菌感染症の起因菌株を収集し、細菌学的特徴及び薬剤耐性機構に関する遺伝子の有無を調査する。尚、その解析結果から迅速検査法の開発、薬剤耐性菌感染症の予防および薬剤治療方針を確立することを目的とする。		
判 定	承 認		

No. 138	わが国で分離されるカルバペナム耐性腸内細菌科細菌の分子疫学的解析（介入調査参画）		
申 請 者	診療部	臨床検査技師長	松本 清
開 催 日	平成27年9月15日		
研究の概要	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌(CRE)感染症とは、カルバペネム系抗生物質が効かなくなった腸内細菌科細菌の総称であり、海外において社会的な問題となっている。本国では稀ではあるがCREによるアウトブレイクが医療施設で発生しており、国内における疫学データも無い状況である。本研究では、国内の医療施設で検出されたCRE菌株を収集し、カルバペネム系抗生物質を分解する酵素であるカルバペネマーゼ産生株の割合を調べる。また、CRE感染症発症患者の臨床経過に関する情報を収集して、統計解析を行い、カルバペネマーゼ産生株と非産生株とで臨床経過や予後にどのような違いがあるかを明らかにし、CRE感染症の予防および治療に役立てることを目的とする研究である。		
判 定	承 認		

No. 139	環境微生物検査用培地（手形平板培地）による手洗い評価		
申 請 者	診療部	臨床検査技師長	松本 清
開 催 日	平成27年10月14日		
研究の概要	近年、ウイルスや細菌による感染症が問題となっており、そのなかで「接触感染」が非常に大きな割合を占めている。ウイルスや細菌が付着した手で、口元や鼻に触れたり、その手で飲食することで、呼吸器感染症や消化器感染症が発症している。この感染症防止には、手洗いが有効とされ、食品調理施設、医薬品製造施設、医療施設等では、徹底した手洗いが行われ、更に手洗い前後の変化をみる『手洗い試験』が実施されている。その試験には、1手洗いチェッカー法、2ATP法、3環境微生物検査用培地による微生物検査法があり、当院では以前より、手洗いチェッカー法を全職員対象に実施し、手洗いの重要性が概ね理解されている。今回、環境微生物検査用培地(手形平板培地)を用い、実際に洗えてない部分の細菌の存在を可視化して、手の汚れを確認し、手洗いの必要性を再認識することを研究目的とする。		
判 定	承 認		

No. 140	認知症外来受診者の栄養状態評価における認知機能の関連性への研究		
申 請 者	診療部	栄養士	吉川 亮平
開 催 日		迅速審査	平成27年12月8日
研究の概要	近年、我が国は超高齢社会に突入し、高齢化に伴う問題も多岐にわたる。特に厚労省をはじめ、国を挙げて健康寿命の延伸に大きく舵を切っている。健康寿命とは言うまでもなく、寝たきりや重い病に罹患することなく、年相応の健康な生活を全うして生涯を終えることだが、これらの根拠は、平均寿命と健康寿命が約10歳の差が生じているという衝撃な報告がなされたことによるものであり、医療従事者をはじめ、国民全体が真剣に取り組むべく急務な課題といっても過言でない。そこで本研究は、当院における物忘れ外来受診者を対象として、栄養状態の評価と認知機能の関連性についてデータを比較検討し、その関連を調査する。		
判 定	承 認		

No. 141	当院における認知症外来患者に対する簡易栄養状態評価（MNA®－S F）についての研究		
申 請 者	診療部	栄養管理室長	村崎 明広
開 催 日		迅速審査	平成27年12月8日
研究の概要	超高齢社会に突入し、我が国は高齢化に伴う問題も多岐にわたり、国を挙げて健康寿命の延伸に大きく舵を切っている。寝たきりや重い病に罹患することなく、年相応の健康な生活を全うして生涯を終えることを健康寿命と言うが、これらの根拠は、平均寿命と健康寿命が約10歳の差が生じているという衝撃な報告がなされたことによるものであり、国民全体が真剣に取り組むべく急務な課題といっても過言でない。そこで本研究は、当院における物忘れ外来受診者を対象として、栄養状態の評価と認知機能の関連性についてデータを比較検討し、その関連を調査する。		
判 定	承 認		

No. 142	高齢者への簡易栄養状態評価（MNA [®] -SF）と認知症外来患者の傾向についての研究		
申請者	診療部	栄養管理室長	村崎 明広
開催日		迅速審査	平成27年12月8日
研究の概要	我が国は超高齢社会に突入し、それに伴う問題も多岐にわたり、国を挙げて対策に乗り出している。認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)にも示されているとおり、認知症への研究及びその成果の普及と推進、早期診断・早期対応のための体制整備等、多岐にわたる。特に早期に認知症の鑑別診断が行われ、速やかに適切な医療の初期対応の体制及び構築が行われるよう認知症疾患医療センターの役割を重視している。そこで本研究は、当院における物忘れ外来受診者を対象とした栄養状態の評価と認知機能の関連性について、データを比較検討し、その関連を調査し認知症高齢者への医療向上を目指す。		
判定	承認		

No. 143	統合失調症の長期入院患者の退院に向けて ～病棟看護師の退院支援の実態調査を実施して～		
申請者	看護部	看護師	中村 雄士
開催日		迅速審査	平成27年12月8日
研究の概要	A病院A病棟では統合失調症の入院患者の多くが1年以上の長期入院であり、また入院期間が長期になればなるほど退院が困難になっている。退院が阻害される主な原因として患者自身の病識の欠如や内服・金銭管理に問題があることは昨年度の研究で明らかになった。こうした問題に関しては以前より患者の退院を阻む要因であると認識して看護介入を行っているが思うような成果が上がっていない現状である。そこで今回の研究では患者の退院を困難にさせている看護師側の要因を明らかにする目的で病棟看護師にアンケートによる実態調査を行う本研究を計画した。		
判定	承認		

No. 144	若手看護師に対する事例をとり入れたディエスカレーションの勉強会の効果		
申請者	看護部	看護師	山本 明日香
開催日		迅速審査	平成27年12月9日
研究の概要	精神科医療においては、患者による職員への暴力が他科よりも多く発生しており、暴力を防ぐ対応として当病棟ではCVPPP(包括的暴力防止プログラム)を取り入れている。当病棟の暴力発生件数は平成22年の14件を最高に減少傾向にあり、昨年・一昨年の発生件数は2件であったことより、病棟職員のディエスカレーションスキルは低くないと考える。しかしその一方で、若手看護師より不安や自信がないとの声が聞かれている。当病棟でもスキルアップと不安の軽減、自信の獲得を目的に勉強会を行ったが、勉強会だけでは自信獲得へとは直接繋がらなかった。そこで事例を用いたディエスカレーションの勉強会を行うことで、自身の日々の関わりとディエスカレーションの関連や影響を振り返る機会となり、関わりに自信とゆとりをもって関わる事ができるのではないかと考えた。		
判定	承認		

No. 145	レビー小体病（LBD）と非レビー小体病（non-LBD）における神経画像所見の検討		
申請者	診療部	神経内科診療部長	小竹 泰子
開催日		迅速審査	平成27年12月10日
研究の概要	123I-MIBG心筋シンチ(MIBG)はパーキンソン病(PD)やレビー小体型認知症(DLB)などのレビー小体病(LBD)では心臓のMIBG集積が低下し、アルツハイマー型認知症(AD)などの鑑別に有用であると指摘されている。また123I-FP-CITドパミントランスポーターSPECT(DAT)はLBDで線条体集積低下を認め、ADなどとの鑑別に有用であると指摘されている。99mTc-ECD脳血流SPECT(ECD)は、DLBや認知症を伴うパーキンソン病(PDD)で後頭葉の血流低下を指摘されている。また、最近では頭部MRIを行い、早期AD画像診断支援システム(VSRADadvance2)でのVOI間萎縮比により、ADとDLBの鑑別が可能であると指摘されている。しかし、これらの神経画像検査のうちLBDに対しての精度は明らかにされていない。		
判定	承認		

No. 146	終夜睡眠ポリグラフ検査における睡眠開始時レム期の出現率および診断的意義の検討		
申請者	診療部	第1神経科医長	細川 宗仁
開催日		迅速審査	平成27年12月21日
研究の概要	睡眠障害国際分類第3版ではナルコレプシーの診断において、終夜睡眠ポリグラフ検査(以下、PSG)の睡眠開始時レム期(以下、SOREMP)を反復睡眠潜時試験(以下、MSLT)のSOREMPに算入可能となった。これまでヒポクレチン欠損を伴うナルコレプシー群でPSGSOREMPの出現率、特異度が高いことは報告されているが、それ以外の過眠症群での情報は十分ではない。本研究では過眠症が疑われる患者についてPSGSOREMPの特徴、出現率、診断的意義を明らかにすることを目標とする。		
判定	承認		

No. 147	脳脊髄液中の睡眠・覚醒関連物質の測定検査		
申請者	診療部	第1神経科医長	細川 宗仁
開催日	平成27年12月21日		
研究の概要	ナルコレプシーでは脳脊髄液中のオレキシンが有意に低下していることが明らかとなっている。ナルコレプシーやそれ以外の眠気をきたす疾患で、オレキシン等の視床下部の神経ペプチドが眠気をもたらすメカニズムに関与している可能性がある。日中の過眠を訴える患者において、脳脊髄液を採取し睡眠覚醒関連物質を測定検討することで、睡眠覚醒障害の診断、原因究明、治療の向上に資する。		
判定	承認		

No. 148	医療観察法病棟の治療プログラムによる抑うつ症状の改善～対象者が自己効力感を感じられるような医療者の関わりを振り返って～		
申 請 者	看護部	東病棟看護師長	南 英理子
開 催 日	平成28年1月4日		
研究の概要	医療観察法病棟において、外出・外泊は退院に向けた治療の一貫で有り、医療職者が同行し、対象者の観察を行っている。特に重大な他害行為に及んだ場所に出かけることは、病状悪化やPTSDの可能性があるため、細心の注意が必要となり、外出外泊先に選択することは少ない。今回、他者との交流を避けて入院生活を送っていたA氏は、本人の強い希望があり、他害行為を行った自宅に外泊訓練をすることになった。A氏は、入院時には陽性症状は治まっていたが、外泊訓練を開始する頃、抑うつ状態が見られた。多職種によるカンファレンスでも議論される中、本人の意思を尊重して、他害行為のあった自宅への外泊訓練が開始された。外泊訓練の回数を重ねるごとに、抑うつ傾向が徐々に改善され、問題なく比較的早く退院に至ることができた。これまでの研究では、抑うつ状態は、自己効力感が高いほど改善される1)と有り、今回のA氏の外泊訓練でも自己効力感が徐々に高まり、抑うつ状態が改善され、退院に繋がったのではないかと考えた。何らかの医療者のA氏への関わりが、徐々に自己効力感を高め、抑うつ状態を改善させたと考えた。そこで、自己効力感が高まる医療者の関わりがどのようなものであったのかを明らかにしたいと考えた。		
判 定	承 認		

No. 149	若手看護師へのディエスカレーションの知識教育による不安と自信の変化		
申 請 者	看護部	東病棟看護師長	南 英理子
開 催 日		迅速審査	平成28年1月25日
研究の概要	当病棟において、暴力事例は年に数例発生しており、暴力リスクのある患者との関わりの中で若手看護師からは、「どう対応していいかわからない」「不安」「怖い」との声が聞かれた。当院では暴力を防ぐ対応として、包括的暴力防止プログラム(以下CVPPPとする)の研修を行っている。その中で、暴力、攻撃性のある対象者への介入の第一選択はディエスカレーションであるが、ディエスカレーションの技術を習熟することに対し、文献では「ディエスカレーションの教育の方向性について、精神科経験年数を積むことでディエスカレーションのスキルが向上する。習熟には多くの経験と時間が必要である」と述べており、また「若い看護者の方が暴力を受けないような介入技術の習得が経験的に不十分であるために暴力的な出来事に、より遭遇している」と述べ経験年数の少ない看護師に如何に早い段階でスキルを習得させるかが課題であると述べている。以上のことから、今回、精神科経験年数5年未満の看護師に焦点をあて、ディエスカレーションの知識についての学習会を実施することで、患者と関わる際の不安が軽減され、より患者との関わりに自信をもてるのではないかと考えた。		
判 定	承 認		

No. 150	The utility of the combination of cognitive markers and visual rating of medial temporal lobe atrophy on CT in discriminating dementia with Lewy bodies from Alzheimer disease comparison of MRI markers using VSRAD advance 2		
申 請 者	診療部	心理療法師	小林 信周
開 催 日		迅速審査	平成28年2月9日
研究の概要	認知症剖栓症例上疫学調査下DLBAD次頻度飛約20%占成、DLBとADは臨床的および病理的に重複があり、鑑別診断が困難な場合がある。先行研究江、C、認知機能検査の一部の項目MRI江KMTAの視覚的評価ADDLBの別有益飛口。古方仁、認知機能検査MRI価の組合和世、AD群VaD+健常群、AD群健常群、AD群MTAの視覚的評価他の認知症群…た対象に対し、		
判 定	承 認		